

# 女性はどのようにイメージ化されてきたか (3)

## ——18世紀英国小説に描かれたジェンダー観——

鈴木 万里

### 1. 序

西洋の伝統的な女性像は「創世記」のエヴァに始まり、その後「2番目に創造され、最初に罪を犯した者」もしくは「墮落の根源」として否定的なイメージを付与されていったことを前々稿で述べた。その人間観を継承して構築されたキリスト教は、「男子は婦人にふれないがよい」また「私（パウロ）のように、ひとりでおれば、それがいちばんよい」と、禁欲や独身を称揚して女性嫌悪をさらに強めていった。一方でマリア信仰の広がりにもかかわらず、西洋ではあらゆる女性は「エヴァの末裔」として罪深い存在と見なされ、服従と沈黙を求められた。そして男性に対して、女性の邪悪な本性に警戒を怠らぬようにと繰り返し警告がなされてきた。また、紀元前4世紀以来アリストテレスの性別を階層ととらえる考え方が支配的で、女性の劣性を強調し続け、さらに13世紀トマス・アクィナスの神学もそれを補強していった<sup>1)</sup>。女性のイメージは、エヴァとマリアという対照的な人物像によって象徴され、長い間極端な女性嫌悪と女性崇拜とが共存していたと考えられるが、おおよそ17世紀までの英文学における女性像は、「愚か、狡猾、好色、おしゃべり、出しゃばり」など否定的なものが多い。ジェフリー・チョーサー作『カンタベリー物語』（14世紀末）に登場する「バースの女房」が典型例である。あるいは、同作者による『トロイラスとクリセイデ』のクリセイデのように、致命的な裏切りによって男性を破滅に追い込む不実な「誘惑者」として描かれることも多かった。

ところが、18世紀後半になると女性のイメージは一変する。たくましく猥雑な女性たちは忽然と姿を消し（または脇役に押しやられ）、清らかで慎ましく真面目な女性像が数多く出現する。さらに19世紀に入ると、女性は極度に理想化され「家庭の天使」<sup>2)</sup>として賞賛を浴び、社会の倫理的な要としての役割を担うに至る。このような「悪徳の源」から「美德の鑑」への女

性イメージの転換は、いかにして起こり、何を意味しているのでしょうか。また、どのような社会背景が、女性像の大がかりな書き換えを必要としたのであろうか。本稿では、この変化の主な舞台となった18世紀の英国で誕生し、主流となった文学ジャンルである小説を取り上げ、3つの時期（18世紀初め、18世紀半ば、18世紀後半）に分けて、女性像の変化に着目する。まず、女主人公の人物造形や生き方を分析し、さらにその社会背景を考察する。扱う作品は、次にあげる当時のベストセラー5作である。イライザ・ヘイウッド『過ぎたる愛』（1719）、サミュエル・リチャードソン『パミラ』（1740）、ヘイウッド『ベツィ・ソートレス嬢の物語』（1751）、フランシス・バーニー『エヴェリーナ』（1778）、アン・ラドクリフ『森のロマンス』（1791）。なお、必要に応じて他の作品も参照する。

## 2. 17世紀末から18世紀初めまで

かつては「小説」というジャンルの起源を18世紀における中産市民階級の台頭とリアリズム重視の傾向に求めて、ダニエル・デフォー（1661-1731）、サミュエル・リチャードソン（1689-1761）およびヘンリー・フィールディング（1707-54）から始めるのが通例であった。しかし、1960年代以降のフェミニズム批評の成果によって、それまで英文学史から排除されてきた女性作家の存在が明らかになるにつれて、17世紀後半から数多くの散文作品が書かれ、さかんに読まれていたことが判明した。デイル・スペンダーは、ベストセラー作家イライザ・ヘイウッド（1693-1756）が「小説」（novel）というジャンルの確立に寄与したと述べている<sup>3)</sup>。また、ジョン・リチェッティは、アフラ・ベーン（1640-89）やドラリヴィエール・マンリー（1663-1724）ら女性作家が始め、イライザ・ヘイウッドが継承した‘amatory fiction’「愛欲小説」に小説の起源を求めている<sup>4)</sup>。ベーンやマンリーは、政治的対立を背景にした上流社会のスキャンダルを下敷きにした小説などを書いた。それらの作品には、陰謀、裏切り、復讐、不倫、同性愛など貴族的放蕩文化の特徴が顕著に現れ、モラルとは無縁な波瀾万丈の世界が展開される。例えば、ベーンの短編『美しい浮気女』（1688）は典型的な悪女型ロマンスで、主人公ミランダは自らの美貌と才覚を武器に、恋愛を利用して男性を意のままに動かし、欲望のおもむくままに生きるが、悪事を重ねても罰されることなく幸せな余生を送る。きわめて世俗的しかも非現実的な形ではあるが、女性の自我の追求を肯定している点が特徴である。

## イライザ・ヘイウッド『過ぎたる愛』 Love in Excess

この作品は出版当時、デフォーの『ロビンソン・クルーソー』(1719) やスウィフトの『ガリバー旅行記』(1726) と並ぶベストセラーで、1750年までに少なくとも9版を重ねたという。

物語はスペイン継承戦争で活躍した後、宮廷に復帰したデルモント伯爵を中心に展開する。美男子で快活、会話の才も見事なデルモント伯爵は、社交界の寵児として数多くの女性に崇拜される。莫大な財産をもつアロヴィーサは、デルモント伯爵をひそかに熱愛し、匿名の手紙を出して気を引こうとする。ところが、デルモント伯爵はアミーナに崇拜されていると誤解し、気ままな遊び相手と考える。嫉妬に燃えるアロヴィーサはあらゆる手段を講じてふたりの仲を邪魔し、ついにデルモント伯爵との結婚を実現する。伯爵に愛されていると信じていたアミーナは、絶望の末に修道院に入る。

財産めあてで結婚したデルモント伯爵は妻に関心を示さず、後見人として自宅に引き取ったメリオーラを深く愛するようになる。メリオーラも心惹かれるが、立場をわきまえて伯爵の求愛には応じない。伯爵の友人で密かにアロヴィーサを攻略しようとするデスペルネイ男爵の思惑と、その妹で伯爵を誘惑するメランサの介入、さらに、夫の浮気相手を突き止めようと必死のアロヴィーサの策略が絡み合って、物語は複雑な展開をたどる。結局、アロヴィーサとデスペルネイ男爵は事故死を遂げ、自分が不幸の原因と責任を感じたメリオーラは少女時代を過ごした修道院に籠もる。自分の剣で誤って妻を死なせたデルモント伯爵は傷心の旅に出る。

メリオーラとの文通を唯一の希望にしてローマでひっそりと暮らす伯爵は、莫大な財産をもつ美しい未亡人キアマラに熱愛され、追いかけられる。心に決めた女性がいると拒絶すると、敵意と欲望をむき出しにするキアマラに伯爵は幻滅する。やがてメリオーラが修道院から誘拐されて行方不明との知らせを受けて伯爵は動揺し、ローマを発って捜索の旅に出る。密かに伯爵を愛するヴィオレッタは変装し小姓として付き添う。旅の途中で伯爵は偶然メリオーラに再会し、互いの愛情を確かめ合う。自分の家出が父親の死を招いたことを知ったヴィオレッタは嘆いた末、熱病で亡くなる。ようやく伯爵とメリオーラは幸福な結婚にたどり着く。

デルモント伯爵を中心としてこのような物語が展開し、前半はさらに、伯爵の弟ブリリアンとアロヴィーサの妹アンセリーナの恋愛談が絡む。後半は

メリオーラの兄フランクヴィルとキアマラの義理の娘カミラの恋愛談が同時進行し、きわめて複雑な筋立てとなっている。

『過ぎたる愛』には、数多くの女性たちが登場するが、女性像は大きく2種類に分かれる。まず、野心家で快楽を追い求める、独占欲の強い女性たちである。デルモント伯爵を獲得するためにあらゆる手段を尽くして結婚を果たすアロヴィーサ、既婚者デルモント伯爵を誘惑して妊娠するメランサ、伯爵に一目惚れして思いを遂げようとし、失敗して服毒自殺を図るキアマラは、いずれも自らの欲望にきわめて忠実で直情径行型である。目的のためには手段を選ばず、相手を騙すことも躊躇わず、大胆かつ巧妙に行動する点では、ベーンの描いた「ミランダ型」の特徴をもっている。対照的なのが、愛に支配され、翻弄される無垢な女性たちである。デルモント伯爵に愛されていると誤解して窮地に追い込まれ、絶望して修道女になるアミーナ、デルモント伯爵の弟ブリリアンと相思相愛になるアロヴィーサの妹アンセリーナ、既婚の後見人デルモント伯爵を愛してしまい理性と欲望の葛藤に悩むメリオーラ、デルモント伯爵を慕って小姓に変装して家出するヴィオレッタ、メリオーラの兄フランクヴィルと密かに愛し合うカミラ、そしてド・サギリエ侯爵の愛情を取り戻すために女中に変装して屋敷に住み込む婚約者シャーロットは、愛情に殉じることも厭わない、一途で純粋な女性たちである。しかし、彼女らは決して無力で従順で受け身的な態度で恋愛に身を焦がすのではない。むしろ、「ミランダ型」同様に、自らの欲望を自覚し、主体的に行動する積極性を備えている。女性側から先に好意を見せてはならないという掟にもかかわらず、カミラは別人の名前を使って自分から手紙でフランクヴィルを呼び寄せて気持ちを確かめるし、メリオーラは行方不明後、デルモント伯爵が同じ屋敷に滞在中と知って、深夜伯爵の寝室をひとりで訪れる。いずれも恋愛の実現に向けてきわめて大胆に行動することを厭わない。それでは、「ミランダ型」女性像と彼女らとの違いは何であろうか。それは、前者が抱くのは征服欲や独占欲を伴う快楽目的のつかの間の情欲にすぎず、罪と恥の意識を残すのに対して、後者は内なる美と結びつき、魂を傾けた、不滅不変の高貴な愛の持ち主であると定義され、その違いが強調されている。(p. 224)<sup>5)</sup>そして、愛はコントロール不能なものなので、貧困、病気、障害や他の災難と同じく、その支配に屈しても非難の対象とはならない (p. 185) とされる。愛に憑かれた状態は高貴な人格を示すという、いわば恋愛至上主義が表明されている。そして、「ミランダ型」も「無垢の乙女型」もともに、欲望や愛の実現に向けて主体的に行動する女性たちの姿勢が肯定さ

れている点が、この小説の特徴として注目に値する。

一方、主人公デルモント伯爵の人物像は、物語の進行につれて大きく変化する。小説の冒頭では、野心家の彼は財産のないアミーナを捨て、莫大な資産をもつアロヴィーサと結婚し、やがて妻を無視して被後見人メリオーラを誘惑しようとして失敗する。しかし、妻の死後は後悔してメリオーラへの思いに忠実に生き、他の女性からの誘いには目もくれずに隠遁に近い生活を送る。そして、ようやくメリオーラと再会し、相思相愛を確認して幸福な結婚を実現する。言い換えれば、典型的な貴族的放蕩主義から、試練と苦悩を経て、近代的友愛結婚主義へと宗旨替えをし、真の幸福にたどり着いたのである。このような「改心した放蕩貴族」のパターンは、社会の近代化に伴う貴族文化凋落の兆しとも考えられ、次世代の小説にも受け継がれていく（特に後述の『パミラ』はこれを踏襲している）。

しかし、センセーショナルな筋立てで女性の欲望と自我の追求を肯定的に描いて人気を集めた官能的な「愛欲小説」は、18世紀半ばになると「非現実的」と「不道德」という理由で批判の対象となり、やがて忘れ去られていく。そしてその頃、まったく異なる価値観を体現した女主人公を提示した小説が人気を博し、その後の小説における女性像を決定づけることになった。リチャードソンの『パミラ』(1740)である。

### 3. 18世紀半ば

#### サミュエル・リチャードソン『パミラ』

ピューリタニズムを信奉していたリチャードソンは、ベーン、マンリー、ヘイウッドを墮落した作家たちとして批判し、善を描くことによって読者に良い影響を与えようとした<sup>6)</sup>。その意図は『パミラまたは報われた美德』という題名にも示されている。ジャネット・トッドによれば、この作品は娯楽のみならず女らしさのイデオロギーに関わるモラルを提示し、教訓小説(didactic novel)という形式の評価を著しく高めたという<sup>7)</sup>。

15歳のパミラはその美しさ、気だての良さゆえに、奉公している旧家の老婦人に気に入られ可愛がられていたが、老婦人の死後、その息子のB氏に目をつけられて執拗な誘惑にさらされる。貞節は命より尊いと両親から教えられていたパミラは必死に抵抗し、危機的な場面では失神して危うく難を逃れる。怒ったB氏はパミラを解雇して親元に帰すと偽って、別邸に幽閉

し厳しく監視させ、パミラが両親に宛てた手紙を途中で奪って盗み読みして、経過を逐一把握する。やがて、B氏は愛人としての条件を提示して迫るが、断固として拒絶される。ところが、しばらくパミラの手紙を読むうちに、その美德と高潔な人柄に深い感銘を受け、自らの悪しき行いを反省したB氏は、身分の差にもかかわらず求婚するに至る。パミラもひそかにB氏に惹かれていたことを認める。その後、結婚したパミラは、その美貌、淑徳、模範的な態度ゆえに近隣の上流の人々から惜しめない賞賛を受ける。そして、初めはこの身分違いの結婚に反対して激怒していたB氏の姉ディヴァーズ侯夫人と和解して、めでたく屋敷に戻り、夫婦のあるべき心構えが述べられる。

この小説でまず注目すべきことは、美德を体現しているのが女性パミラであり、悪徳（あくまで矯正可能な範囲ではあるが）は男性B氏に属する点である。これは従来の、「女性＝愚か、軽率、邪悪」「男性＝知的、高潔、寛大」という伝統的な男女観を覆している。なぜこのような既成概念に反する描き方が説得力をもちえたのであろうか？ここで考えられるのは、階級とジェンダーのアナロジーである。ジェントリー階級であるB氏は保守的な支配階層に属する。一方、小間使いのパミラは労働者階級であるが、その価値観や行動原理は中産階級に特有のピューリタンの的である。特に女性の貞節を何にも代え難い財産と考える点に特徴がある。パミラは上位の身分である主人の意向にあくまで抵抗して自らの名誉を守るのみならず、悪しき意図をもって近づく主人に意見すら辞さない。このような、信念を貫く強い意志を備え真面目な生活をめざすピューリタンの生き方が、上層階級に顕著に見られる墮落した快楽重視の生活様式よりはるかに優れていることを、効果的に印象づける狙いをもつと考えられる。従って、「下位の階層＝女性」「上位の階層＝男性」という対応ゆえに、「美德＝女性」「悪徳＝男性」という構図が導き出されたと推測できる。

さらに、「報われた美德」という題名に着目すると、ここでの「美德」とは女性にとって「貞節」を意味することは興味深い。パミラは「従順、沈黙」という伝統的な美德の概念には当てはまらない。雇い主の要求に対しては不従順であり、両親に宛てた長大な手紙で自分の置かれた状況や気持ちを延々と述べるなど驚くほど「饒舌」である。場合によっては「生意気、傲慢」という烙印を押されかねない（事実、思うように事態が進展せずに苛立つB氏はしばしばパミラを生意気と責める）。しかし、パミラが、当初予定されていた愛人待遇ではなく、妻の座を獲得できたのは、ひとえに貞節とい

う美德をあくまで守り通したからである<sup>8)</sup>。結果的に、パミラは「貞節は命より大事」というピューリタンの倫理観を固持したことで、自らが持つ唯一の資源の価値を最大限につり上げることに成功したと言える。これは、入手が困難であるほど価値が上がるという経済原則にも合致した戦略でもあった。B氏は姉の勧める貴族令嬢との縁談を退けてパミラを妻にふさわしい女性として選ぶ。すなわち、女性は家柄や身分よりも、正しい振る舞いと気だての良さが重要であると、この小説は主張しているのである。この「正しい振る舞い」とは欲望を抑えて貞節を守ることを意味する。女性が自らの欲望に忠実に生きることを肯定した「愛欲小説」とはまったく異質の「禁欲」「節制」という価値観が優勢となり、ピューリタンの生活信条が立身出世に有効であることを例証した小説が誕生したことがわかる。一方、パミラの側は奇妙にも、誘惑にさらされている時には、その邪悪な意図ゆえにB氏を非難し、断固として拒絶するにもかかわらず、求婚された途端にご主人様のありがたい好意を感謝して受け入れ、実はひそかにB氏を愛していたことを認める（この偽善性が同時代の作家フィールディングに痛烈に批判されるのも当然と考えられる<sup>9)</sup>）。これは、結婚に帰着する恋愛は道義的に正しく、そうでない恋愛は不当なものという「恋愛の選別基準」が設定されていることを意味する。すなわち、「正しい恋愛＝結婚というゴールを迎えるはず」「正しくない恋愛＝結婚にまで成熟しない不純なもの」という分類がなされ、「恋愛結婚」が正当な規範として示される。そして、貞節＝美德しか資本をもたない女性にとって、恋愛結婚が社会的成功を手にする唯一の道であることがわかる。

さらに興味深いことは、パミラという年若い女性が壮年（と思われる）雇い主のB氏を改造し、倫理的に矯正する点である。「女性は男性よりはるかに劣る存在」という伝統的なジェンダー観では、このような展開は不可能であったに違いない。B氏は初め好色な征服欲をあらわにした人物像として描かれ、美しく慎ましい15歳の小間使いパミラに対して何度も誘惑や強姦を試みる。しかし、パミラの頑強な抵抗にあい、またその手紙や日記を盗み読みして彼女の心情や信念を知るようになると、次第に支配欲が姿を消し、自らの行いを後悔して、思いやりを示し始めるのである。ついには、「どんな女よりも愛している。お前なしには生きていけない…が、自分を制して…今後無理やり言うことを聞かせようとすることはしないつもり」と譲歩し、やがて求婚するに至る。自由な性愛を肯定する貴族的放蕩主義は誤った行動規範として排され、敬意と愛情に基づく近代的な恋愛結婚のみが正しい男女の

関係として称揚される。パミラの美德が B 氏を道徳的に覚醒させるという筋立ては、女性が高いモラルによって男性に影響を与え、「家庭の司祭」として精神的な拠り所となるべきという 19 世紀ヴィクトリア朝の考え方にもつながる。しかし、ここで忘れてならないのは、女性に倫理的な使命を担わせたからといって、女性が男性よりも上位の立場を獲得したという意味では決してないことである。むしろ、女性側には男性以上に道徳的規範を厳密に強制された結果、美德（＝貞節）が女性にとって必須の資質になったと言えるであろう。B 氏とパミラは雇い主と使用人という上下関係にあり、結婚後もパミラは「旦那様」「my master」として夫に接し、主従関係は維持される。女性の影響力とは必ずしも対等の関係を前提とするものではないことが明らかである。

パミラが B 氏に与えた影響は、性愛に関する行動の変化に留まらない。サミュエル・ジョンソンが指摘したように<sup>10</sup>、リチャードソンの小説は筋の面白さで読ませるものではなく、「情緒」(sentiment)が重要な役割をもつ。パミラは両親に宛てた手紙の中で、自分の置かれた苦境、戸惑い、悲しみ、恐れなどを克明に綴る。その内面の動揺に応じて彼女の身体は、涙を流し、頬を赤らめ、鼓動を早め、失神するという敏感な反応を示す。このような繊細な感性と身体は、高い倫理性の表出であり、特に女性に顕著な特質であると 18 世紀には考えられるようになる。B 氏はパミラの手紙を取り上げて読むうちに、次第に「鋭敏な感性」を学習していく。そしてその苦悩や絶望に共感することによって、自らの非を認め、パミラを両親の元へ返すことを決意して、病気になる。この時点で B 氏は、傍若無人な特権階級から「繊細な感性と身体」を備えた近代人へと変身したのである。勇猛果敢な男性像に代わって、礼儀正しく他人への共感や配慮のできる洗練された男性像が望ましいとされる傾向は、18 世紀後半から目立ち始める。いわば「男性の女性化」という現象の最も早い事例が B 氏に認められる。そして「感性崇拜」の流行をもたらした 'Novel of Sentiment' または 'Novel of Sensibility' の源流が『パミラ』に顕著に見られるのである。

しかし、女性の高い美德が常に報われるとは限らない。リチャードソンは 8 年後に出版した『クラリッサ』では一転して、信頼して身を預けた男性に幽閉され、求婚を退けると陵辱を受けて、死に至る有徳の女主人公を登場させて、その苦悩と葛藤を延々と描いている。パミラとクラリッサは「美德」という共通項をもちながらも、正反対の結末をもつ。これは、女性の運命が、男性次第でどのようにも左右される不安定なものであることを語ってい



る。本人の努力と才覚で人生を切り開くことのできる男性（ロビンソン・クルーソーのように）とは異なり、女性には自律的な生が許されず、あくまで男性との関係において生き方が決まることを、リチャードソンの小説は示しているといえる。

リチャードソンは『パミラ』や『クラリッサ』で、誘惑や男女関係を中心とした「愛欲小説」の筋立てを巧みに利用しつつ、モラルを前面に出して知的な娯楽を提供し、読者を感化教育する新たな役割を小説に担わせた。「愛欲小説」の衰退と『パミラ』の大人気は、品行方正、自己研鑽、礼儀正しさを重視するピューリタンの中産階級文化が、貴族的放蕩文化を完全に駆逐したことを示している。同時に、大胆、傲慢、煌びやかな貴族女性よりも、慎み深く、優しく、か弱く、欲望のない（少なくとも見せない）女性像がもてはやされるようになった。ナンシー・アームストロングによれば、18世紀初頭に女性に対する評価基準が変化したという<sup>11)</sup>。すなわち、血統や身分に代わって、美德やモラルそして適切な振る舞い方が重視されるようになったのである。その結果、18世紀には女性向けの「コンダクト・ブックス」と呼ばれる作法本が大流行し、1693年から1760年までに少なくとも500種の版が刊行され、1770年代から1830年代にかけてはさらに人気を博したという<sup>12)</sup>。読者は近代市民社会でどのように振る舞えば好感を与え、自分の評価を高め、社会的成功を収めることができるか、または、望ましい結婚相手を引きつけることができるかに関心を寄せたことが容易に想像される。このような読者層の嗜好の急激な変化に応じて、かつてのベストセラー作家ヘイウッドは方向転換を迫られたに違いない。そして誕生したのが、愛欲小説とは一転して教訓的なメッセージをもつ『ベッツィ・ソートレス嬢の物語』(1751)である。

### イライザ・ヘイウッド『ベッツィ・ソートレス嬢の物語』

裕福な旧家の娘ベッツィは両親を亡くし、後見人のもとで暮らしている。人柄もよく美德の持ち主ではあるが、虚栄心から数多くの男性に賛美される心地よさを楽しみ、なるべく結婚を先に延ばそうとする。その結果、誠実な求婚者トゥルーワースはベッツィの真意をはかりかねて離れていく。ベッツィは不注意から何度も危険な目に遭いそうになり、体面を重んじる兄たちは不祥事を恐れて妹を無難に結婚させようと画策する。やがてベッツィはトゥ

ルーワースの高潔な人柄を再認識するが時すでに遅く、好きでもないマンデンと結婚するはめになる。結婚生活は予想以上に悲惨で、妻を上級召使いと考える夫は生活費も満足に渡さず、妻を好色な貴族に取り持とうとしたり、浮気をしたりと、傍若無人の振る舞いを続ける。しかし、幸い夫が早く亡くなったので、ベッツィはこれまでの無思慮な行動を深く反省し、妻を新婚3ヶ月で亡くしたトゥルーワースと再婚する。

ヘイウッドは、美德＝貞節が女主人公に欠かせない要件であることを十分に理解している。しかし、パミラと異なり、ベッツィは財産をもち、男性の下位に甘んじることを好まない。むしろ、若い女性にとってある程度の自由を享受し、力を行使できる唯一の時期は求婚される期間だけと承知しているので、できる限りこの時間を長引かせて楽しもうとする。複数の男性の心を思いのままにして虚栄心を満足させるベッツィは恋愛感情とは無縁である。ただし作者は、女主人公が無節操、不道德と誤解されないように、しばしば弁解や説教をまじえて読者の反感を買わぬよう配慮している。やがて、ベッツィの無邪気な征服欲は、手厳しい現実によって罰せられる。女性は慎ましく従順でなければ、誤解を受け悪意にさらされる結果となると思知らされる。不幸な結婚生活によって自らの非を痛感したベッツィは、夫を亡くした後かつて自分の元を去ったトゥルーワースへの思いに悩む。こうして傲慢なベッツィは、過去の愚行を恥じ、満たされぬ恋に涙を流す「センチメンタルな」女主人公へと変身する。そして、結婚するなら「愛」ゆえであるべきという恋愛結婚礼賛 (p. 563)<sup>13)</sup>へと宗旨替えをして、めでたくトゥルーワースと結ばれ、「美德が報われた」(p. 568)という定型で締めくくられる。

このような女性の改心、矯正の過程をたどるパターンをジェイン・スペンサーは‘Reformed Heroine’ (改心したヒロイン) の系譜と呼び、18世紀後半の伝統としてフランシス・バーニーやジェイン・オースティンに受け継がれていく重要な分野と指摘している<sup>14)</sup>。ただし、「改心」と言っても娼婦がキリストに帰依するマグダラのマリアのような劇的な物語ではない。女性に対する道徳的締め付けが強まっていた18世紀には、美德＝貞節は女主人公の前提条件であった。従って、悪女や墮落した女性を主人公に設定することはほぼ不可能であり、典型的な展開は‘Coquette’<sup>15)</sup>と呼ばれる、小悪魔的で可愛らしく、無邪気な女性を中心となる。彼女らがささいな虚栄心や社交上の無知、罪のない先入観などに気づいて行いを改め反省し、より品行方正で完璧な女性へと成長していく過程が丹念に描かれる。すなわち、基本的には社会の現状を肯定して、そこで生きるための適切な作法や心構えを学習し

ていくという、体制順応型の物語といえる。このパターンはいわば「コンダクト・ブックス」の小説版として、読者に人生モデルを提供し、「How to もの」の役割を果たしたと考えられる。そして、このような自己認識と改善の姿勢は、自己研鑽を重視するピューリタンの倫理観に合致するものでもあった。

この「改心したヒロイン」の系譜に属する小説には、女主人公が孤児またはそれに近い境遇をもち、父親的な存在として指導的な役割を担う、‘lover-mentor’<sup>16)</sup> (恋人兼助言者) が登場することが多い。『ベッツィ』でも、次兄のオクスフォード大学の先輩に当たるトゥルーワースが、交際する同性の友人の選定や、田園での静かな生活の望ましさなど様々な話題に関して、ベッツィに示唆を与え、自己覚醒を促す。ベッツィは反発しながらも、最終的にはトゥルーワースの助言が正しく、自分が愚かで思慮に欠けていたことを認める。すなわち、lover-mentor と女主人公の関係は、教師と生徒にも通じるもので、男性側が判断力、良識、知性などに優れており、女性は未熟で逸脱しやすいという前提が暗黙のうちに存在する。男性が設定した努力目標に向かって、女性が近づき、達成した時に結婚というご褒美が与えられるという、男性上位のポリティクスがうかがえるのである。

このように、ヘイウッドは読者の嗜好の変化に合わせて、女性が男性に対して行使できる自由や力など愚かな幻想にすぎないと悟って、男性主導の社会に適応、同化する女主人公を描いた。この時期には社会通念に抵抗や反逆を試みる女性像を提示することが、きわめて難しく危険であったと考えられる。にもかかわらず、作者は様々な形で社会に偏在する不公平な「二重基準」を指摘し、問題提議をしていることは注目に値するであろう。

まず、女性には貞節が厳しく要求される一方で、男性に対しては、婚姻関係以外の性的関係が容認されている点があげられる。この小説で lover-mentor として規範を示す役割を担うトゥルーワースは、見ず知らずの女性に熱烈に崇拝され、誘われるままに気軽に関係をもつ。(p. 270) やがてこの女性が、ベッツィが身を寄せる後見人グッドマン氏の妻の連れ子フローラと判明して驚くものの、特に後ろめたいと感じる様子もなく、しばらく関係を続ける。フローラは結婚を期待するが、トゥルーワースには全くその気はなく、一時の火遊びと割り切っている。結局、彼がこの秘密の関係を後悔するのは、ベッツィへの思いを断ち切った後、慎ましく優しいハリエット (ベッツィとは対照的な性格) との結婚を考え初め、つきまとうフローラの存在が哀れで疎ましくなった時である。(p. 333) フローラはその後、旧悪が暴

かれて夫に追放された母親とともに、やむを得ずジャマイカに渡ることになる。トゥルーワースの方は何ら咎めを受けることなく、ハリエットと幸福な結婚をする。女性にとっては致命的な出来事も、男性には「誰でもすること」(p. 320)と当然視される。作者は、「分別のある男性は、敬意を抱けない女性を本当に愛することはない」(p. 271)とフローラの無分別を非難するが、男性側にのみ性的自由が認められている社会通念に釈然としない思いが読者には残るに違いない。さらに、トゥルーワースの親友でハリエットの兄サー・バジルは、高級娼婦のもとに出入りしているが、トゥルーワースを同行することすらある。いずれも尊敬を集める人格すぐれた紳士という設定ながら、性的にかなり放埒であることが示唆される。また、ベッツィの長兄は大陸旅行から帰国後、ロンドンに家を借り、パリから連れ帰った愛人を住まわせるが、特に周囲の激しい非難を浴びることもない。しかし、妹ベッツィは兄の愛人と同居するのは外聞が悪いため、同じロンドンに住みながらも、後見人の家を出て兄と暮らすことができないという不自由を強いられる。「若い女性の名誉は繊細なもので、好ましくない噂だけでも破滅してしまう」(p. 144)が、男性に関しては全く事情が異なることがわかる。兄の都合のよい弁解によれば「女性の美德は男性の美德とは違う」(p. 335)というわけである。

次に、妻の不貞が明らかになれば夫は妻を離縁できるが、その逆は成り立たないという不公平も指摘される。ベッツィの後見人グッドマン氏は、妻が結婚前に関係をもっていた愛人に脅迫されて密かに多額の借金を作っていたことを知り、離婚訴訟の手続きに入る(ただし、グッドマン氏はまもなく心労で亡くなり、離婚訴訟は親族の財産相続訴訟に引き継がれる)。ところが、ベッツィが夫の不貞を知って兄の家に身を寄せると、夫から別居の意志はないので、戻ってこなければ法的に連れ戻す手段を講じると脅される。当時、妻は夫の資産の一部と見なされていたため、夫の同意なしに家を出れば違法行為と見なされた。結婚が妻の隷属を意味することはベッツィも承知しており、それゆえ可能な限り結婚を先に延ばして自由を楽しみたいと考えたのも当然と言える。

'I wonder...what can make the generality of women so fond of marrying? —It looks to me like an infatuation.—Just as if it were not a greater pleasure to be courted, complimented, admired, and addressed by a number, than be confined to one, who from a slave becomes

a master, and, perhaps, uses his authority in a manner disagreeable enough.' (p. 431)

求婚時代には奴隷のようにかしずき、結婚した途端に主人として権威を振りかざす夫には我慢がならないベッツィは、「なぜ女性は結婚したがるのか？」と疑問を呈している。当時、妻の財産はすべて夫の所有となるため、パミラと異なり財産をもつベッツィは、結婚すればかえって不自由な生活を強いられることになる。小遣い年額 150 ポンド（衣装代などに使う）が結婚前に取り決められた額であったが、夫に渡される生活費が足りないため、自分の小遣いをやりくりして何とかしのぐ。妻を上級召使いと考える夫はベッツィの懇願に耳を貸すどころか、不従順を責める。あくまで対等の関係を求めるベッツィは夫に敬意を示されずに、従順にするのは馬鹿だと反論する。(p. 450) アントニー・フレッチャーは、近代の家父長制では結婚こそが女性を従属させる中心的装置であったと述べているが<sup>17)</sup>、ベッツィの不幸な結婚生活はそれを例証するものと言えるであろう。きわめて注意深くではなるがヘイウッドは、結婚が女性の自律性と尊厳を奪う制度であることを示唆しているのである。かつて「愛欲小説」で女性の自我の追求を肯定した作者のささやかな抵抗であったのかもしれない。

それならば、結婚しない生き方はありえなかったのか？ 残念ながら、体面を気にする兄たちは、「家族の名誉は女性の側にかかっている」(p. 293) 「女性の評判は家族にとってより重要」(p. 335) と、妹の幸福よりも、自分たちに迷惑が及ぶことを恐れ、天真爛漫ゆえに不始末をしでかして悪い噂が立たないうちに、妹を片づけてしまおうと躍起になる。心やさしく兄思いのベッツィは、こうして押し切られ、望みもしない結婚に踏み切ることになるのである。

以上のようにヘイウッドは、女性が人生を楽しむことを制限し、結婚という幽閉状態へと追いやる様々な圧力を描き、一方、男性には相当な性的自由が容認されている社会の現状とその不公平さを指摘している。にもかかわらず、女主人公が正しい行動規範と高いモラルの必要性を痛感し、「慎ましく従順な女性」へと改心することによって幸福が成就できるという、「正しい結末」を取らざるをえなかった。

Thus were the virtues of our heroine (those follies that had defaced them being fully corrected) at length rewarded with a happiness,

retarded only till she had render'd herself wholly worthy of receiving it. (p. 568)

「美德の報い」を受けるに値するべく成長した女性像が、18世紀半ばの読者や文壇に受け入れられる切り札であったことがわかる。そして、「成長する女性像」は、この後の小説に登場する女主人公のパラダイムとなっている。

「自らの意志や欲望に忠実な女性」から「慎ましく高いモラルを備えた女性」へと変化したのは、小説の女主人公ばかりではない。女性作家もまた、女性に対する要求水準が厳しくなるにつれて、模範的な女性であることが求められるようになっていく。ベーン、マンリー、ヘイウッドのような、スパイ活動の経験があったり、重婚により私生児をもうけたり、女優として舞台に立ったりという派手な経歴は忌み嫌われ、品行方正でデリカシーを備えた女性として規範となることが作家の必要条件となる。作品と作家の経歴は対応関係にあると見なされたので、放埒な内容は女性作家にとって致命的となった。ヘイウッドはこのような女性イデオロギーの変化を察知し、文壇や読者の検閲によって軌道修正を迫られ、過去のみだらな小説を反省し、経験を積んだ賢明な助言者として若い世代に同じ過ちに陥らぬよう警告するという立場を取った<sup>18)</sup>。いわば作家自身が‘Reformed Heroine’となったのである。その後、18世紀半ば以降の女性作家たちは、多くが文壇の大御所であったチャードソン、フィールディング、ジョンソンらの庇護を受け、その助言や激励のもとに執筆、出版していった。セアラ・フィールディング、シャーロット・レノックス、フランシス・バーニーらである。その結果、女性作家の社会的立場は以前より格段に高くなったが、作品の内容は制限され、教訓的な色彩が強くなり、表だって男性中心社会への抵抗や告発を行うことはできなくなっていった。

#### 4. 18世紀後半

18世紀の後半になると、女性に対する慎みやデリカシーの規範が一層強化され、女性作家にとって経済的自立をめざして執筆するという社会的活動はますます困難になっていく。したがって、家の中で余技としてひっそりと小説を書き、匿名で出版する例が一般的となる。そのような形で生まれたべ

ストセラーが、フランシス・バーニー『エヴェリーナ』(1778)、アン・ラドクリフ『森のロマンス』(1791)である。この2作に共通する点は、女主人公は身元が明らかでなく財産ももたず、孤立無援に近い状態で物語が始まることである。しかも、定住する家をもたず、状況の変化に応じて転々と居場所を変えざるをえない。精神的な砦としての両親をもつパミラや、相当な資産と信頼できる後見人に恵まれたベッツィーとは異なり、きわめて不安定な生存状況に置かれた女性たちの試練と苦難の日々が語られる。彼女たちがもつのは、貞節や慎みという美德（それさえしばしば脅かされるが）と美貌だけである。しかも、規範からのごくわずかな逸脱も致命的となるほどに、女性に対する要求水準が高くなる。女性のセクシュアリティは警戒され、極力隠蔽される。女主人公たちは傷つきやすく、適切な保護者をもたないために、直接、間接の暴力にさらされる。女性をめぐる当時の社会状況が厳しくなっていることを示すと考えられる。

### フランシス・バーニー『エヴェリーナ』

『エヴェリーナ』は、父親代わりの牧師に対する書簡体小説という構成や、身元不明で財産もない（最後には父親の認知と財産を手にするが）女性が貴族の男性に愛され結婚するという展開の点で、『パミラ』に通じるものがある。また、ジェイン・スペンサーが指摘するように、「恋人兼助言者」によって完璧な女性へと成長する主人公を描く点では、『ベッツィー・ソートレス嬢の物語』に似ている<sup>19)</sup>。しかし、エヴェリーナはパミラやベッツィーに比べて、格段に繊細で慎み深く、傷つきやすく、無力である。パミラのようにピューリタンの信念に基づいて誘惑に毅然として対処するほど生意気にはなれないし、さりとして自分の意志や欲望を肯定するベッツィーのようなおおらかさも持ち合わせていない。侮辱や非難を受けても、ただ困惑し内心の動揺を抑えて沈黙することが多い。それだけ女性の行動に対する社会的制約が強く、女性の立場が危ういものであることがわかる。

『エヴェリーナ』の世界では、女性は父親という縦軸と夫という横軸が交わる地点で社会的位置が定まり、それに従って待遇の決まる、相対的な存在である。エヴェリーナはいずれの座標軸ももたないために、あらゆる機会に居場所がないことを痛感させられる。本人が社会の中に定位置をもたないため、周囲の人々も戸惑い、便宜的に彼女がその時に一緒に居合わせる集団の社会階層に準じるものと見なされ、遇される。例えば、貴族と同席している

時にはきわめて丁重に扱われ、低い階層の親戚と行動を共にしている時には無礼な扱いや侮蔑に耐えねばならない。しかも、父親や兄という保護者のない女性は、上流階級の男性による容赦のない性的攻撃にさらされる。エヴェリーナは「敬意を込めて礼儀正しく接してもらうためには、家柄と財産が必要である」(p. 294)<sup>20)</sup>ことを痛感する。彼女はパミラとは異なり、本人の美德と美貌だけでは通用しない現実には直面せざるをえない。また、ベッツィーのように、誤った結婚によって一度失敗しても、反省して最後に正しい相手と結ばれるような、やり直しのきく世界に住むわけでもない。エヴェリーナが参入するロンドンの社交界は、男性にのみ自由な選択権が許され、女性は慎ましく控えていることが要求され、隙を見れば付け入れられる過酷で不公平な社会である。その中で、思慮深いエヴェリーナは次第に社交の規範を学びながら、上流社会にふさわしい振る舞い方を身につけ、放蕩貴族の執拗な攻撃や誘惑をかわして、人格、家柄ともに優れた理想的な貴族オーヴィル卿に求婚される。ジュディー・シモンズが指摘するように、バーニーの世界では、女性は裕福な夫を見つける以外に、行動の自由と生活の資を保証する現実的な解決策はない<sup>21)</sup>。きわめて現実的（ある意味では悲観的）な認識が根底にある。最後にエヴェリーナは父親の認知も得て、3万ポンドの相続人となる。「父の発見と財産の回復」によって、ようやく確固としたアイデンティティを獲得することが可能になる。女性にとっては本人の美德だけでは不十分であり、夫と父親を得て初めて安定的な位置を確保することができるのである。そのような因習的価値観に支配された社会構造に対する表だった批判は示されない。慎ましく清らかな女主人公が、悪徳に染まることなく、セクシュアリティを利用することなく、有利な結婚という社会的成功を獲得するという展開は、女性に対する行動規範がきわめて厳しく制限されていることを示すと考えられる。

また、「恋人兼助言者」として機能するオーヴィル卿は、物語の初めから完璧な人柄と礼儀を備えた理想的な男性像として登場する。エヴェリーナのささやかな失敗や社交上の無知を誤解することなく、常に彼女の美德と真価を信じて疑わない。B氏やトゥルーワースのように、劇的な自己覚醒や、誤解に気づいて後悔に苛まれるという瞬間は、オーヴィル卿とは無縁である。人間的成長を遂げる余地のないスタティックな人物造形は、他の上流男性の偽善や墮落に比べて、やや非現実的な印象すら与える。また、駆け落ちのあげく結婚を拒否し、さらに娘の認知も拒んだ放蕩者のサー・ジョン・ベルモントに対して、娘のエヴェリーナが恨むことなく父への敬愛を示す態度も、



多少違和感を与えかねない。『エヴェリーナ』では、父や夫という伝統的な秩序社会を体現する権威に対する信頼感が絶大であることがわかる。ある意味では、隠れた権力志向の表れと解釈することもできるが、見方を変えれば、それらの権威に保護を求める以外の生き方が、女性には許容されていなかったとも考えられる。

それに対して、母や祖母という存在は、エヴェリーナにとって役に立たず時には迷惑ですらある。特に低い階級出身でデリカシーに欠ける祖母とその粗野な親戚は、エヴェリーナには関わりをもちたくない人々として描かれる。すなわち、快適な生活環境の確保は、上流社会への参入によってのみ実現するが、そのためには権威ある男性の評価を受けることが不可欠なのである。エヴェリーナは初め男性主導の舞踏会に反発を感じ、ささやかな抵抗を試みるが、それが上流の社交ルールに反すると知って、礼儀正しい作法を身につけることで社会の承認を得るという処世術を学んでいく。女性にとって、「美德」、「礼儀作法」、「有力な男性の保護」が生存の安定に不可欠の要素であることを、『エヴェリーナ』は如実に示している。

しかし、屈辱や誘惑にさらされ弱い立場にあっても、オーヴィル卿のような賢明で寛大な理解者に恵まれたエヴェリーナは、まだしも幸運であったと言えるかもしれない。なぜなら、次に述べるように、18世紀末に大人気を博したアン・ラドクリフのゴシック・ロマンスに登場する女主人公たちは、保護者をもたず、権威ある男性からは迫害され、孤立無援の状況におかれるからである。

## アン・ラドクリフ『森のロマンス』

ゴシック・ロマンスの女主人公たちは、エヴェリーナ同様身寄りがなく、保護者も財産ももたず、不安定な境遇にある。しかし、決定的に異なる点は、残虐で身勝手な男性権力者はもはや外面を取り繕うことなく、容赦なく攻撃を仕掛けてくる悪役として描かれることである。その結果、女主人公が抱く不快感は、非礼や侮辱という社交的な嫌がらせや言葉による暴力に留まらず、身体的暴力や強姦、死に対する恐怖として経験される。そして、迫害、監禁、逃走というモチーフが繰り返され、極限状況の中で女主人公の無力さと居場所の無さが強く印象づけられる。

『森のロマンス』は17世紀フランスが舞台となる。修道院で育ったアデリーヌは、不可解な経緯で父親の不興を招き、ある屋敷に監禁された後、偶然

居合わせた見知らぬラ・モット氏に引き渡される。パリで華やかな生活の後、賭博で負債を作って夜逃げしていたラ・モット夫妻は、仕方なくアデリーヌを連れて旅を続けるが、偶然迷い込んだ森で修道院の廃墟を見つけ、隠れ住む。ラ・モット氏は隠し戸の奥で箆笥の中に人骨を見つけ、かつて誰かがここで殺害されたという村の噂を思い出す。しばらくして、嵐の夜に雨宿りのため立ち寄ったこの地所の所有者モンタルト侯爵は美しいアデリーヌに目をつける。一方、アデリーヌは従者のテオに好意をもつ。数日後テオは森でアデリーヌに危険が迫っていると警告する。夜、部屋の壁に掛かるアラス織の裏側に秘密の扉があるのを見つけたアデリーヌは、奥の小部屋で錆びた短剣と巻物を見つける。その巻物には、突然監禁され死を覚悟した人物の絶望の記録が綴られている。まもなく侯爵は正体を現し、愛人になるように迫り、ラ・モット氏も拒否すれば住処を失うと脅すが、アデリーヌは拒絶する。しかし、ラ・モット夫妻が侯爵を手引きする計画と知ったアデリーヌは、密かに逃げ出す。ところが、この逃亡は失敗し、かえって侯爵の別荘に囚われの身となってしまう。侯爵の誘惑を何とか振り切って、夜、窓から抜け出したアデリーヌは、連隊を抜け出して助けに駆けつけたテオに再会し、一緒に逃げる。まもなく、追っ手に囲まれ、テオは連隊を無断で離れた罪で逮捕を言い渡され、もみ合ううちに大怪我を負い、侯爵にも深手を負わせる。アデリーヌは侯爵の指示で、再びラ・モットの住む修道院廃墟に監禁される。一方、復讐の念に燃える侯爵は、アデリーヌがテオに宛てた手紙の封印から彼女の素性を知り、ラ・モットに殺害を命じる。逆らえば旧悪を暴かれると覚悟を決めたラ・モットは短剣を持ってアデリーヌの部屋に忍び込むが、懇願に負けて、密かにサヴォイに逃がしてやる。アデリーヌの逃亡を知った侯爵は追っ手を差し向け、ラ・モット氏を憲兵隊に逮捕させる。サヴォイでアデリーヌは、牧師ラ・リュック一家の世話になり、つかの間の平穏な生活を送る。やがて、テオに死刑の判決が下り、しかもラ・リュック師がテオの父親であることがわかる。一方、ラ・モット氏も死刑が確定する。ところが、テオやラ・モット氏を有罪にした侯爵の旧悪が暴かれ、事態は急展開する。かつて侯爵は兄アンリを領地の修道院廃墟に監禁し、暗殺して財産と爵位を乗っ取り、兄の娘アデリーヌを部下に預けていたが、彼女が成長して尼僧になるのを拒否したために、殺害するよう指令を出していた。しかし、アデリーヌは行方不明になり、後に手紙の封印（母方の紋章）から身元を突き止めた侯爵は、再びラ・モット氏に殺害を指示したという。その後、侯爵は牢で服毒自殺を図り、過去の罪を告白していたため、アデリーヌは相続人

としての権利を回復し、莫大な財産を手にする。彼女は、テオとラ・モット氏の減刑を国王に嘆願し、テオは無罪、ラ・モット氏は国外追放となる。アデリーヌは父の遺骨を一族の墓に埋葬し、喪が明けると、テオと結婚してサヴォイに移り住む。

ゴシック・ロマンスは物語の振幅が大きい割に、勧善懲悪型の単純な結末をもつ。女主人公は美德の持ち主で優しく慎み深い理想的な女性像として描かれ、彼女を迫害する権力者は悪徳に染まった残虐非道な男性で、途中で改心したり罪を悔いたりすることはない（この点で『パミラ』のB氏とは異なる）。父親や夫などの家長的人物は専制的であり、身内の女性に対して理不尽な行動や身勝手な要求をすることが多い。18世紀には女性が公的な領域から閉め出され、家庭こそが女性の居るべき場所であるという考え方が一般化したと言われるが、ゴシック・ロマンスの女主人公は、まさに家の中で迫害され、そこからの逃亡を企てる。家長的人物の暴力ゆえに、女性にとって家が牢獄と化すという、ドメスティック・バイオレンスの可能性を示唆した点は注目すべきであろう。資産をもたない女性にとっては家すらも安住の地ではありえないのである。結末で女主人公の身元が判明し、莫大な資産と領地を相続するのは、女性の人生の安定と幸福には財産が不可欠であることを示唆している。しかも、競争社会から閉め出されている女性にとって、家長という潜在的迫害者に頼らずに富を入手する唯一の方法は、正当な嫡子としての財産相続しかありえない。ただし、このような指摘を現実的な設定の物語で語れば、体制批判として非難を受けることになりかねない。舞台を外国の過去に設定するのは、「ロマンス」という逃避的な雰囲気を作るのに好都合なためもあろうが、それ以上に、女性の置かれた極限的心理状態を同時代の英国の現実として描くことに、躊躇いがあったためと考えられる。しかも、若い女主人公がひとりで森を長い間散歩したり、若い男性の助けを借りて逃亡したりという、上品な礼儀作法に抵触する行動を描く場合に、舞台を時間的、空間的に離れたところに設定する方が、読者に受け入れられやすいという事情もあったに違いない。

次に、女主人公が最後に結婚する男性像について考えてみる。『ベツィー・ソートレス嬢』や『エヴェリーナ』では、良識的な「恋人兼助言者」が登場し、かなりの影響力をもっていたが、ゴシック・ロマンスでは女主人公の恋人はきわめて無力である。テオは一度かろうじて警告したものの、翌日約束を果たせずアデリーヌに適切な助言をすることができない。わずかに侯爵の別荘から脱出する際にアデリーヌに手を貸すが、その後、重傷を負い、

投獄されてしまう。死刑の判決を受けたテオを救うのは、アデリーヌの方である。「愛する人を救う」という女性の美德に抵触しない大義名分のもとに、積極的に行動して価値ある成果をあげることで、女性のもつ潜在的な力を印象づけることができる。「慎み深さ」という制約ゆえに女性が表現することを禁じられた、有益な行動への意志と力への願望を示唆する展開と言えるであろう。

さらに、無力な男性は恋人だけではない。アデリーヌの実父、前モンタルト侯爵は、弟の陰謀により幽閉され暗殺されていた。善なる男性は、迫害され、犠牲になる。しかし、彼が監禁されていた数週間の間に残した日誌を偶然発見したアデリーヌは、その苦悩に深く共感する。最後にそれが実父であることを知り、一族の墓に手厚く葬ることによって、アデリーヌは恥辱の死から父を救済したのである。『エヴェリーナ』同様、『森のロマンス』でも、「父の発見」は重要な意味をもつ。それは、女主人公のアイデンティティ発見であり、遺産相続による生活の安定をも約束するからである。

## 5. 女性像の変化

18世紀を通して、女性像の変化を辿ってみると、美德(=貞節)、モラル、慎みの重視という点で次第に女性に対する要求水準が厳しくなり、女性が清らかで善良で無力な存在となっていくことがわかる。それでは具体的に、女性の欲望の所在、主体的な行動の可能性、経済的立場の視点から、5人の女主人公を比較してみることにする。

『過ぎたる愛』に登場する女性たちはすべて自らの愛や欲望に忠実であり、メリオーラも既婚のデルモント伯爵への思いを隠すことができない。再会の場面では、メリオーラが深夜伯爵の寝室を訪れて互いの思いを確認し合う。メリオーラは大胆で積極的に行動する一方で、清らかで美德を備えた女性として描かれる。愛に支配されることは、高貴な人格である証明と見なされる。すなわちこの小説では、欲望の肯定が美德と矛盾せず、むしろ精神的成長や自己実現に結びついている点が特徴的である。

ところが、『パミラ』では女主人公の欲望は徹底的に隠蔽される。これ以降の小説では、女性の欲望を描くことがタブー化する。女性は男性の欲望に翻弄される存在であって、その逆はあってはならないこととされる。

『ベッツィー・ソートレス嬢の物語』では、性的欲望の代わりに、恋愛における力の行使という欲望が語られるが、それも非難され、ベッツィーは手

厳しい報復を受ける結果となる。女性がいかなる形であれ支配を望むことは許されないのである。しかし、ベッツィーは誤った結婚という試練を経て教訓を学び、繊細な感情を備えた従順な女性へと変貌をとげ、最後には幸せな結婚を実現する。力の幻想を捨てることが、女性にとって社会に受け入れられる基準であることを、ベッツィーは痛みとともに悟ったのである。

18世紀後半に入ると、『エヴェリーナ』や『森のロマンス』のように、女性の立場はきわめて弱くなり、侮辱や攻撃を避けて身の安全や居場所を確保することに多くの労力が費やされる。そして、好ましくない男性の求愛や誘惑を拒否するという形で、ごく間接的に女主人公の意志や欲望が暗示されるに留まる。

このように、女性の欲望は次第に小説から消えていき、受け身の態度が顕著になり、周囲の状況に翻弄される度合いが高くなる。女性の主体的な行動という点から見ても、『過ぎたる愛』のように、自分の意志に基づいて、愛の実現に向けて積極的に行動する善良で純粋な女性たち——メリオラ、カミラ、ヴィオレッタのような——は、パミラ以降には現れない。むしろ、様々な制約に阻まれ不自由をしいられながらも、礼儀正しさの規範に反さない範囲内でいかに自分の立場や生命を守るかが、女主人公たちにとって最大の課題となる。

女性の欲望が否定され、慎みに対する基準が強化されるにつれて、女性の主体的行動は不名誉なこととして一層制限されるようになる。女性は自分の意志で行動を起こしてはならず、自ら積極的に好ましい男性に近づいてもならない。交際を求めてきた男性の好意を受けるか否かの選択を許されているだけであった。となれば、女性が果敢に行動しても非難を受けない唯一の理由は、好ましくない男性からの迫害や虐待から身を守る手段としての、やむを得ない逃走となる。女性がひとりで家を出るという非常事態を正当化するためには、その男性が同情の余地のないほど徹底的に邪悪な存在でなければならぬ。そうでなければ単なる女性のおがままとして、糾弾されてしまうからである。女性の放浪や移動はふしだらで犯罪を誘発するものとして最も警戒された<sup>22)</sup>。ゴシック・ロマンスに単純すぎるほど極悪非道な悪漢が登場するのは、美德を損なうことなく女主人公の大胆な行動を可能にする設定として最適であったためである。また、見方を変えれば、逃走という形であれ、女性が果敢に行動することへの願望充足の役割を果たしているとも言えよう。18世紀末におけるゴシック・ロマンスの大流行は、閉塞的な女性の人生に対する不満や抵抗の表現としても解釈できる<sup>23)</sup>。

女主人公の経済的立場を見ると、次第に女性が社会的弱者として追いつめられていく過程が見てとれる。メリオーラの経済基盤については直接言及がないが、デルモント伯爵の後見人の娘であり、兄が大陸旅行をしていることから、かなりの資産があると想像される。『過ぎたる愛』には裕福な女性たちが多数登場し、手元不如意なのは、むしろデルモント伯爵や弟ブリリアンら男性の方である。デルモント伯爵は財産目当てでアロヴィーサと結婚し、ブリリアンは財産がないために資産家アンセリーナに思いを伝えるのを躊躇する。後半部で、デルモント伯爵を熱愛するキアマラも莫大な財産をもつ未亡人である。

パミラは貧しいが、女中として働いて経済的に自立し両親に仕送りもしている。その上、亡くなった大奥様から譲り受けた贅沢な衣装や身の回り品もあり、身分の割には豊かと言えるであろう。

ベッツィーは父親から相当の財産を相続しており、ロンドンで家を借り、家具を揃え、衣装を新調して外出し、かなり自由に消費生活を楽しんでいることがうかがえる。むしろ、ベッツィーが経済的に苦労するのは、結婚して財産がすべて夫の所有となった時である。既婚女性は独立した人格として見なされなかったため、夫が保護者として資産の管理をする。このような法的不公平が指摘されている点は注目に値する。

エヴェリーナやアデリーヌは無一文の境遇で登場する。エヴェリーナの後見人は祖父の家庭教師であった老牧師で、田舎で引退生活を送っており、実質的な保護者とはなり得ない。また、アデリーヌの身の上はさらに深刻で、父親（実は養父であったことが最後に判明するが）の怒りを買って、見ず知らずの夫婦のもとに偶然身を寄せることになる。いずれも、経済的基盤も家も持たず、身元すら確かでないというきわめて不安定な生存条件をもつ。彼女らが最後に「父の発見」（母ではなく）を果たすのは、それが女性にとって身元の証明と富の入手につながる唯一の方法であることを示している。同時に、美德だけでは幸福を手にするには不十分であるという現実的なメッセージも伝えている。これは、エヴェリーナの「敬意を込めて礼儀正しく接してもらうためには、家柄と財産が必要」という認識にもつながる。ふたりの女主人公は見かけほどかけ離れた世界に住むわけではないことがわかる。

近代市民社会が成立して、自由や平等という概念が重視された18世紀末に、貴族の父親を発見して相続人と認定され幸福な結末を迎える女性たちを描いた小説が流行するとは、何とも皮肉な現象と言えよう。しかし、これは当時の女性の置かれた苦境を忠実に表している。自由な社会活動から閉め出

され、家庭という私的領域に囲い込まれた女性にとって、アイデンティティや富の獲得は事実上不可能であり、先祖伝来の資産を入手するという時代錯誤的な幻想によって、かろうじて夢見ることが許されたと考えられる。

以上のように、18世紀後半には、女性の社会的立場が一層不安定となり、女性が傷つきやすい弱者となっていた。しかも、女性の弱さは美として評価された。崇高と美について定義したエドモンド・バークは1757年に、女性の美が、弱さ、繊細さ、内気さにあると述べている。

The beauty of women is considerably owing to their weakness, or delicacy, and is even enhanced by their timidity, a quality of mind analogous to it.<sup>24)</sup>

過酷な条件のもとで、追いつめられ傷ついた内気な女性像は、美なる存在として見なされていたことがわかる。ゴシック・ロマンスの大流行は、このようなサディスティックな嗜好と審美的観点が深く結びついていたことをうかがわせる。

また、ジェイン・スペンサーによれば、18世紀の理想的女性像とは、「とりたてて何も語るべきことのない女性」<sup>25)</sup>であったという。とすれば、小説の主人公となるような女性は、理想から逸脱した存在であることを意味する。語るに値することのない女性の人生が最も望ましいとは、何ともやりきれない。シャーロット・レノックスの『女ドン・キホーテ』(1752)では、尊敬を集める伯爵夫人が自らの人生について次のように語って、主人公アラベラのロマンス中毒をたしなめる場面がある。「私は生まれて洗礼を受け、有益でふさわしい教育を施され、両親の薦めである伯爵に求婚され、両親の同意と自分の気持ちに従って結婚し、その後幸せに暮らして参りました」<sup>26)</sup> 分別を備えた女性の人生はこれ以上であってもこれ以下であってもならないのである。おそらく、従順で慎ましく平凡な人生を送る大多数の女性にとって、現実離れしたゴシック・ロマンスは、退屈な日常性を拒否して、自力で困難を克服するような充実した生の実感を味わう機会を与えてくれたに違いない。

また、ゴシック・ロマンスは、近代以降に理想的な私的空間とされた「家庭」が、まさに女性を閉じこめる「牢獄」となりうることと示唆した点でも注目に値する。本来、女性を保護すべき立場にある家長的人物はその責任を

果たさず、法的に自立した人格として認められていなかった女性は一層追いつめられる結果となる。このような女性の社会的弱者としての立場は、その後、メアリ・ウルストンクラフトが『女性の虐待またはマライア』(1798)で、夫の陰謀によって精神病院に監禁された女性の絶望と苦悩を綴って、「結婚という牢獄の中へ一生閉じ込められた」<sup>27)</sup>状況をよりリアルに描いた(ただし、作者の死により未完)。すなわち、ゴシック・ロマンスは単なる現実逃避ではなく、ラディカルな告発を隠蔽する装置としても機能したと考えられる。むしろ、身近な男性に幽閉される女主人公としてはリチャードソンの『クラリッサ』(1748)が代表格であり、「囚われの女」は18世紀を通じてテーマのひとつと言えるであろう。

近代市民社会におけるリアリズムを特徴とする小説というジャンルが、18世紀末には最も非現実的なゴシック・ロマンスの大流行を生み出したことは、興味深い現象である。しかも、それは一過性の現象に終わることなく、19世紀にはブロンテ姉妹やウイスキー・コリンズ、さらにはエドガー・アラン・ポーなどに受け継がれ、推理小説という新たな領域を生み出していく。また、対照的な内容をもつフランシス・バーニーの風俗小説は、その後ジェイン・オースティンに大きな影響を与え、さらにヘンリー・ジェームズの心理小説に受け継がれ、英米小説の本流を形成していく。このように、女性の生き方を描いた小説は大きな潮流となって、現代まで続いていくのである。

それでは、18世紀に「悪の源」から「美德の鑑」へという女性像の大幅な書き換えを必要としたのは、どのような時代背景であったのか。社会の移り変わりに伴う女性像の変化について、検討してみる。

近代市民社会の成立は、ピューリタニズムの影響を受けて自己研鑽を重視する自由な競争社会を生み出した。男性に対しては、『ロビンソン・クルーソー』に見られるような、チャレンジ精神と勤勉な労働による、自己実現と世俗的成功を可能にしたが、女性には事実上、社会での活動が閉ざされていた。従って、経済的自立の見通しをもたない女性は、望ましい結婚相手を獲得することでしか、生活の安定と社会的認知を得ることができなかった。しかも、18世紀から19世紀にかけての英国では、女性人口がかなり男性を上回っていたという<sup>28)</sup>。当然、経済力のある望ましい結婚相手は不足し、競争が激化する。「コンダクト・ブックス」と呼ばれる作法本の大流行は、中産階級の価値観を社会に浸透させる絶大な効果をもったと言われる。中でも、



女性向けには「貞節、清純、慎み、従順、優しさ、忍耐、慈愛、献身、敬虔」などを目標として掲げ、これを手本に女性たちは非の打ち所のない振る舞い方や心構えを競って、有利な結婚をめざした<sup>29)</sup>。この背後には、ピューリタニズムの定着により、自己研鑽が高く評価されたことも大きく関係している。コンダクト・ブックスの著者には、教会や宗教関係者が多い。一方、ピューリタニズムは、家庭生活を重視し、家庭内の女性の役割を大幅に引き上げたが、聖書に従って女性の活動を家庭内のみに限定した。しかも、個人の自律性を重んじたにもかかわらず、女性には意志や欲望の自粛を求め、女性の貞節を夫の財産と見なした。これは、近代市民社会の価値の基本をなす個人の資産を、正当な継承者である嫡子から奪う可能性のある女性のセクシュアリティを厳重に監視するためであった<sup>30)</sup>。このようにして、18世紀には女性に対する道徳的要求水準が高くなり、わずかな逸脱も許されなくなっていった。

さらに、18世紀後半には、「理性」を重視する古典主義に代わって、「感性や情緒」がもてはやされるようになる<sup>31)</sup>。商業資本主義の発展は、勇猛果敢さや質実剛健という伝統的な男性的資質よりも、礼儀正しさや鋭敏な感性を、洗練された属性として高く評価した<sup>32)</sup>。ピューリタニズムの精神を受け継いだ国教会福音派の布教活動はその傾向を一層促進した。他者への共感、慈愛、博愛など、繊細な感性と優しい情緒は、とりわけ女性が特性を生かせる分野であった。情緒重視の潮流は、女性の清純さや慈愛を強調し<sup>33)</sup>、性的感情に代わって母性が女性を特徴づける資質とされていく。次第に、女性は高いモラル意識と愛情で家庭の中心となり、資本主義競争社会の過酷な試練に立ち向かう男性を癒し、慰める使命を担うとされていく。このようにして、社会/家庭という公/私の領域のみならず、精神的な側面でも性役割分業が成立する。しかし、これは社会が女性をそのような役割に固定しただけには留まらず、女性たちもまた、精神的優位を示すことで社会的劣性を挽回して自らの立場を守ろうと、率先して引き受けた役割であった。そして、この傾向が19世紀には理想化され、女性は無垢で清純な存在であり、欲望や利己心とは無縁で、家族のために献身的に奉仕することが生き甲斐であるという「家庭の天使」像に集約されることになる。ちなみに、ローレンス・ストーンは、情愛的個人主義の発達に伴って友愛結婚が一般化するにつれて、家庭内での女性の地位が向上したと考えているが<sup>34)</sup>、スーザン・スティヴスはむしろ、情愛が重視されたために女性は自由意志の名のもとに、「愛情」という抑止力によって活動を厳しく制限されたと述べている<sup>35)</sup>。必ずしも家庭

内での地位の向上が、女性の自律的な思考や行動に結びつくとは限らないことになる。むしろ、家庭内に活動を限定されたことによって、家が「牢獄」となる危険性を18世紀の小説が指摘している点は見逃せない。

さらに、18世紀には女性の身体に対する認識もまた書き換えられ、男性と女性はその適性や精神構造のみならず、異なった身体をもつ別種の存在としてとらえられるようになった。トマス・ラッカーによれば、古代ギリシア以来、男女は生物的に異なるふたつの性としてではなく、単一の身体構造における完成度の差として認識されていたという。完全に発達すれば男性になり、何らかの事情で不完全な状態で生殖器官が体内に裏返しに留まると、女性になると考えられた。この「ワン・セックス・モデル」は17世紀まで主流をなし、男女が生物学上異なる存在であると見なす「ツー・セックス・モデル」が優勢となるのは18世紀といわれる<sup>36)</sup>。また、17世紀末から、従来の体液説（人間の身体は4つの体液からできているというアリストテレスやガレノス以来の学説）に代わって、神経構造に基づく感性の心理学が強調されるようになった。すなわち、女性は弱く繊細な神経をもつために、その身体は病気や不調の源であり、男性の身体は体力、知力の基であるという<sup>37)</sup>。「身体」がパラダイムの転換に伴って、作り替えられたのである。さらに、19世紀になると、排卵のメカニズムが解明され、女性が自らの欲望や快楽とは無関係に、周期的に受胎可能となることがわかる<sup>38)</sup>。それまでは、女性の性的満足が受胎を促すと考えられていた。その結果、女性は受動的で非・性的な存在であるという言説が一層強化され、女性の本質を母性や自己犠牲と結びつける傾向が顕著になっていった。こうして、近代において、女性は「罪深い誘惑者＝エヴァ」から「慈悲深い母＝マリア」へと完全に生まれ変わったのである。

## 6. 結語

以上のように、18世紀には「エヴァ→マリア」という女性像の逆転現象が起こり、その背景には、近代市民社会の成立に伴う大きな価値観の変化が関わっていたことが明らかとなった。ヘイウッドが描いたような、女性の欲望を肯定する恋愛は不謹慎で不道德と強く非難され、女性は淑やかで謙虚に振る舞い、男性から選ばれるのを待つべきとのマナー規範が強化された。シューメーカーによれば、このような女性性の変化は1730年代までに起こったという<sup>39)</sup>。その後はリチャードソンの小説に見られるように、「男性＝攻

撃的かつ積極的」，「女性＝貞淑かつ受動的」という構図が成立した。しかも，男性による富と権力の独占的支配が進み，女性は周縁化された存在となるにつれて，恋愛は経済的に上位にある男性主導の市場となる。そして，ピューリタニズムの浸透に伴い，恋愛は結婚に帰着すべきものと見なされるようになり，健全な家庭生活を築く準備段階として位置づけられ，恋愛が本来もっていた反社会性や反逆性は削ぎ落とされていった。

また，女性にとっては貞節が何より大切とされ，男性の性的逸脱は許容されても，女性には厳しい道德律が課せられるという二重基準が一般化した。女性のセクシュアリティは，清純，無垢という名のもとに隠蔽され，コンダクト・ブックスによって巧妙に制御されたのである。

結婚は政治機構と同様に聖なる使命ではなく，契約関係であるという17世紀後半におけるジョン・ロックの理論は，伝統的な家父長型家族モデルを脅かしたと言われる<sup>40)</sup>。しかし，18世紀に恋愛結婚が浸透すると，夫婦が対等なパートナーという建前のもとに，実質的には男性優位のヒエラルキーを組み込んだ「近代家族」が成立した。「家族」は経済的，社会的な基本単位であるばかりでなく，性役割形成の場としても重要な機能を果たしてきた。その中で女性は，経済的依存を前提として「愛情」という名のもとに自発的服従を選ぶことで，家父長制支配構造を内面化していったのである。その結果，社会を大きく変革した民主化の影響を最小限に食い止めて，家庭は愛情を中心原則とし，合理的な思考や平等原理の進入を拒む「聖域」と化した。こうして近代は，女性を家庭の中心に据えることによって，巧妙に社会から隔離したのである。

18世紀に起きたエヴァからマリアへの女性イメージの転換は，決して女性の存在を肯定的に見直した結果ではない。抑圧され，排除された「他者」を理想化することは，邪悪な存在として弾圧するのと同様に，性差別イデオロギーの一種であると，エリザベート・ゴスマンは述べている<sup>41)</sup>。いわば，女性の意志や力を効果的に抑制する方法の変更が，女性像を書き換えたのである。愛情による自発的服従が，最も有効かつ安定的な装置であることを近代社会は発見したと言えるであろう。

注)

- 1) Shoemaker, Robert. *Gender in English Society, 1650-1850 : The Emergence of Separate Spheres?* London : Longman, 1998, p.17.
- 2) ヴィクトリア朝に賛美の対象となった良妻賢母型の理想的な女性像。Coventry Patmore (1823-96) の詩に由来する。
- 3) Spender, Dale. *Mothers of the Novel*. London : Pandora, 1986, pp.89-91.
- 4) Richetti, John. *The English Novel in History 1700-1780*. London : Routledge, 1999, pp.18-51.
- 5) Haywood, Eliza. *Love in Excess, or The fatal enquiry. 1719*, edited by David Oakleaf, second edition, Broadview Press, (2000). 以下この作品の引用はこの版による。
- 6) Spencer, Jane. *The Rise of the Woman Novelists from Aphra Behn to Jane Austen*. Oxford : Blackwell, 1986, p.76, p.89.
- 7) Todd, Janet. *The Sign of Angellica, Women, Writing and Fiction, 1660-1800*. New York : Columbia U. P. 1989, p.147.
- 8) OED によると次のような定義がある。cf. Virtue : 2. c. Chastity, sexual purity, esp. on the part of women.
- 9) フィールディングもヘイウッドも『パミラ』のパロディ本を書いている。
- 10) 都留信夫編著『イギリス近代小説の誕生——十八世紀とジェイン・オースティン』ミネルヴァ書房。1995年, p.60.
- 11) Armstrong, Nancy. *Desire and Domestic Fiction : A Political History of the Novel*. New York : Oxford U.P., 1987, p.3.
- 12) Shoemaker, Robert. *op. cit.*, p.21.
- 13) Haywood, Eliza. *The History of Miss Betsy Thoughtless, 1751*, Oxford World Classics (1997). 以下この作品の引用はこの版による。
- 14) Spencer, Jane. *op.cit.*, pp.140-144.
- 15) *Ibid.*, p.142.
- 16) *Ibid.*, p.156.
- 17) Fletcher, Anthony. *Gender, Sex & Subordination in England 1500-1800*. New Haven and London : Yale U.P., 1995, p.375.
- 18) Ballaster, Ros. *Secudtive Forms, Women's Amatory Fiction from 1684 to 1740*. New York : Clarendon Press, 1992, p 196.
- 19) Spencer, Jane. *op. cit.*, p.153.
- 20) Burney, Fanny. *Evelina or the History of a Young Lady's Entrance into the World*. 1778, Oxford World's Classics (1968).
- 21) Simons, Judy. *Fanny Burney, Women Writers*, Totowa : Barnes & Noble Books, 1987, p.28.
- 22) バーニーの最後の小説が *The Wanderer* 『放浪者』(1814) であることは、作者の問題意識を考えるうえで、重要であると思われる。
- 23) Spencer, Jane. *op. cit.*, p.187.
- 24) Burke, Edmund. *A Philosophical Enquiry into the Origin of our Ideas of*

- the Sublime and Beautiful*. 1757. Oxford World's Classics (1990), p.106.
- 25) Spencer, Jane *op. cit.*, p.190.
  - 26) Lennox, Charlotte. *The Female Quixote*. 1752, Oxford World's Classics (1989) p 327.
  - 27) メアリ・ウルストンクラフト『女性の虐待あるいはマライア』1798年，川津雅江訳 あぼろん社。(1997年)，p.138.
  - 28) Spencer, Jane. *op. cit.*, p.14.
  - 29) Spencer, Jane. *op. cit.*, pp.15-18, Armstrong, Nancy *op.cit.*, pp.60-69.
  - 30) Poovey, Mary. *The Proper Lady and the Woman Writer : Ideology as Style in the Works of Mary Woolstonecraft, Mary Shelley, and Jane Austen*. Chicago : U of Chicago P., 1984, pp.5-6
  - 31) 感性は sensibility, 情緒は sentiment。'sensibility' は、「鋭敏な感性」を意味し, 'sentiment' は, 「情緒, 感情」のみならず, 「道徳的判断」も含む。
  - 32) Barker-Benfield, G. J. *The Culture of Sensibility : Sex and Society in Eighteenth-Century Britain*. Chicago : U of Chicago P., 1992, pp xxv-xxvi
  - 33) Shoemaker, Robert. *op. cit.*, p.20.
  - 34) ローレンス・ストーン『家族・性・結婚の社会史』勁草書房, 1991年, 第8章。
  - 35) Staves, Susan. *Married Women's Separate Property in England, 1660-1833*. Harvard U P., 1990, p.224.
  - 36) cf. Laqueur, Thomas. *Making of Sex : Body and Gender from the Greeks to Freud*. Cambridge, 1990
  - 37) Shoemaker, Robert *op. cit.*, p.20.
  - 38) Poovey, Mary. *Uneven Developments : The Ideological Work of Gender in Mid-Victorian England*. Chicago : U of Chicago P., 1988, p.7.
  - 39) Shoemaker, Robert. *op. cit.*, p.40.
  - 40) Ibid., p.45.
  - 41) エリザベート・ゴスマン編『女性の視点によるキリスト教神学事典』日本基督教団出版局 (1998) p.182.